

山本 恵美子

## 要 旨

日本語学習者の学習段階とあいづちの使用能力との間には何らかの相関関係があるのではないかと考え、中国語、韓国語、英語を母語とする9名の学習者（初級3名・中級4名・上級2名）及び日本人1名を対象にあいづち使用に関する実態調査を行い、そこに現れたあいづちを頻度と種類に注目して分析した。今回の調査に関する限り、若干の例外を除けば、学習段階が上の学習者ほどあいづちの出現頻度が高くなり、あいづちの種類も増えていることがわかった。一方、日本語母語話者のあいづちの使用は、頻度の点から見ても、その種類の多様さから見ても、上級学習者をさらに上回っている。他に、学習者のE系のあいづち詞の使用率が日本人に比べて低いこと、日本人のみが使っていて学習者に使用例がない表現がいくつかあることなどがわかった。

[キーワード] あいづち, 聞き手, 初級学習者, 中級学習者, 上級学習者

### 1. はじめに

堀口純子(1990)は上級学習者の対話における聞き手としての言語行動の実態を分析し、相づち、先取り、聞き返し、その他7種類の働きかけについて調べている。その中に次のような記述がある。

この報告(松田 1988)の初級学習者と比べると、学習が進めば、「読み」「書き」「話し」「聞き取り」の能力と同じように相づちも、頻度、種類、適切さのどの点においても上達し、上級学習者の相づちは日本人に近いものになってきているといえる。(p.30)

日本語における日本人のあいづちの研究はこれまでもかなり進められてきているが、日本語学習者のあいづちの習得に関する研究は筆者の知る限りではほとんどなされておらず、この記述は大変興味深い。しかし、ここで根拠とされている2つの調査、すなわち、堀口(1990)、松田(1988)両氏の調査は調

査状況が異なるため、双方の調査結果を単純に比べることは不可能であろう。

学習者の学習段階とあいづちの使用能力との間には何らかの相関関係があるのではないかと考え、日本語学習者のあいづちの習得過程を研究するために、初級学習者、中級学習者、上級学習者を対象に、一貫した方法であいづち使用に関する実態調査を行った。本稿では、これまでに採集した全資料のうちの半数について、そこに現れたあいづちの頻度と種類に注目して分析を試み、得られた結果を報告する。

## 2. 調査方法

### 2.1 データ収集方法

あいづちの使用の実態を調べるためには、あいづちが自然に引き出されるような状況を設定する必要がある。そこで今回の調査では、被験者に、〔電話で日本人Sに、指定されたトピックに沿ってインタビューをする〕という課題を与えて調査を行った。インタビューという形式を選んだ理由は二つある。一つは、被験者が主に聞き手となるような状況を作りたかったこと、もう一つは、インタビューでは聞き手は話し手が話しやすいような環境を作って話し手の話を引き出すことが通常期待されるため、あいづちの使用が必然的になると判断したためである。同様に、対面インタビューの形式をとらずに電話という媒体を選んだのは、電話による会話では目の前に相手がいないため、頻繁にあいづちを打って、相手の話を聞いているという信号を送ることが特に期待されるためである。また、通常の対面の会話では、うなずき、微笑みや驚きなどの表情といった非言語行動もあいづちとして機能すると考えられるが、今回の研究では研究の対象を言語行動に限定するため、非言語行動を意図的に排除できる電話を選んだ（注1）。

### 2.2 被験者及び協力者

本稿で分析の対象とする資料の被験者は、中国語、韓国語、英語を母語とする20代の女性9名で、初級学習者3名、中級学習者4名、上級学習者2名から成る（注2）。被験者についての詳細を表1に示す。

他に比較のため、日本人J（女性・23才・大学院生）にも同じ調査を実施した。インタビューに答えた日本人Sは、23才の男性の大学院生で、外国人と話した経験はあまりない。

表1 被験者の構成

	性別	年齢	母語	所属／職業	日本語学習時間	在日期間	学階級
C 1	女性	24才	中国語	学部研究生	約 250時間	4ヶ月	初級
C 2	女性	24才	中国語	学部生	約 600時間	1年11ヶ月	中級
C 3	女性	29才	中国語	大学院研究生	約1000時間	3ヶ月	上級
K 1	女性	29才	韓国語	大学院研究生	約 200時間	2ヶ月	初級
K 2	女性	26才	韓国語	学部研究生	約 400時間	1年3ヶ月	中級
K 3	女性	27才	韓国語	大学院生	約 450時間	3年11ヶ月	上級
E 1	女性	22才	英語	英語教師	約 150時間	1年2ヶ月	初級
E 2	女性	23才	英語	英語教師	約 550時間	8ヶ月	中級
E 3	女性	21才	英語	学部生	約 950時間	1年4ヶ月	中級

### 2.3 実験の手順

調査者が被験者に電話をかけ、以下のような指示を与えた。

日本人Sに、Sの趣味についてインタビューをする。その際の聞き方としては、まずSの趣味が何であるかを聞き、次にそれぞれの趣味について、その趣味を持つようになったきっかけ、その趣味の魅力、その趣味に関して今後やりたいことの3つを聞き出すようにする。

その後、Sに電話をかわり、被験者がSにインタビューしている会話を録音した。インタビュー終了後、今度は調査者が被験者にフォローアップ・インタビューを行った。この会話も録音された。ここでは被験者が感想や困難だった点などを自由に述べる機会を作り、また、Sの趣味についてどんなことがわかったかを質問した。実験後、被験者のあいづちの使用あるいは不使用が、話し手にどんな心理的影響を与えたかをみるために、Sにも感想を求めた。以上の手順で得た発話資料のうち、被験者とSとの対話部分をすべて文字化し、分析の対象とした。

### 2.4 あいづちの定義

先行研究におけるあいづちの定義は、あいづちをかなり狭義に解釈しているものから広義に解釈しているものまでかなりの幅がある。しかし本研究の主たる目的は、聞き手としての学習者が、話し手が話しやすいような状況をいかに作り出しているかを調べることにある。そのため、本研究では以下のようにあいづちを定義づけ、狭義のあいづちにとどまらず、広い意味で話し手の話の進行を助けるために発せられたと思われる発話をあいづちとしてとった。

聞き手が、話し手の発話の進行を促したり助けたり補ったりするために、自由意志に基づいて（小宮 1986：45を参照）送る短い表現。形態的には、ハイ、エエ、ウン、アア、ヘエー、ソウデスカ、ナルホドなどのあいづち詞（堀口 1988：16）を中心にした発話、先行する発話の全部あるいは一部の繰り返し、言い換え、話し手の話の先取り（堀口 1988：21）、笑いなどとして現れるもの。

### 3. 結果と考察

#### 3.1 頻度

##### 3.1.1 被験者の打ったあいづちの総数

被験者が各資料中で打ったあいづちの総数は、表2の通りである。分析の対象とした資料の時間を括弧内に示す。

表2 被験者のあいづちの総数

	初 級	中 級	上 級
中国語を母語とする学習者	C 1 7 6 (12分41秒)	C 2 1 1 7 (12分10秒)	C 3 1 3 8 (13分46秒)
韓国語を母語とする学習者	K 1 6 0 (6分06秒)	K 2 1 2 9 (16分57秒)	K 3 1 8 7 (17分22秒)
英語を母語とする学習者	E 1 9 4 (12分26秒)	E 2 1 4 2 (13分52秒)	E 3 9 6 (8分56秒)

なお、日本語母語話者Jの打ったあいづちの総数は311（26分24秒）であった。

##### 3.1.2 1分間あたりに打たれたあいづちの回数

学習者がどのくらいの頻度であいづちを打っているかをみるために、資料中に出現したあいづちの総数を資料の時間で割って、1分間あたりに打たれたあいづちの回数を調べた（注3）。結果を図1に示す。

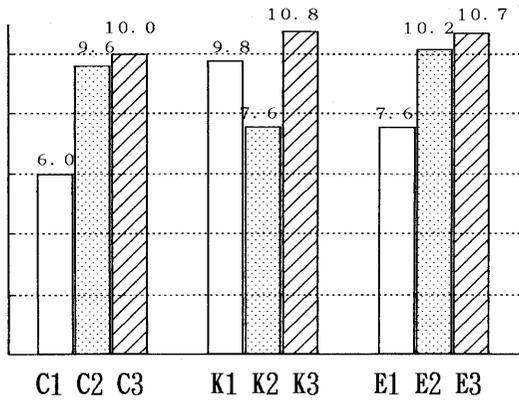


図1 1分間当たりのあいづちの回数

韓国語話者で初級のK1と中級のK2が逆転していることを除けば、全体として、学習段階が上がるにつれて、あいづちの使用頻度が高くなっていることがわかる。学習段階別に出した平均値も、その傾向を示している(図2)。一方、日本語母語話者Jが1分間に打ったあいづちの回数は、11.8回であり、

上級学習者の平均よりもさらに頻度が高いという結果を得た。なお、母語別に出した平均値は、中国語が毎分8.5回、韓国語が毎分9.4回、英語が毎分9.5回であった(図3)。

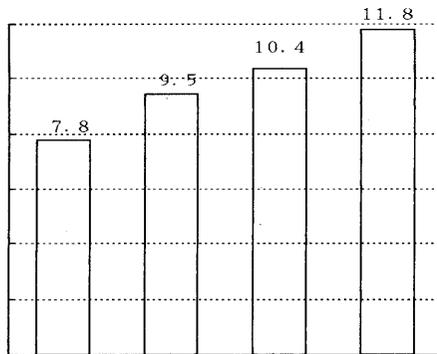


図2 学習段階別平均

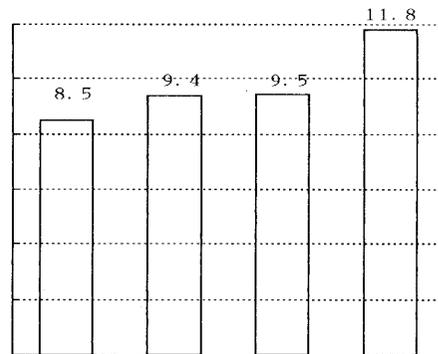


図3 母語別平均

### 3.1.3 時間帯と頻度の関係

水谷(1984)は、あいづちの頻度と語の選択の時間的変化に関し、「あいづちの頻度は話の内容への関わりの深さに比例し、話しはじめのころより話の終わりごろのほうが頻度が高いであろうし、用いられる語もくだけたものに変わるであろう」(p.277)という仮説を立てた。そして、資料の始めの1分間と終わりの1分間を比較したが、この仮説を立証するに足りるだけの差は見られなかったと報告している。

追試の意味で、日本語母語話者Jの資料を時間によって前半、中盤、後半の

3つに区切り、そこに現れたあいづちの数を数えた。しかし結果は、前半：121、中盤：111、後半：79と、やはり水谷の仮説は立証されず、むしろ、話の終わりごろより話し始めのころのほうが頻度が高かった。学習者の資料についても同様のことを調べた（図4）。

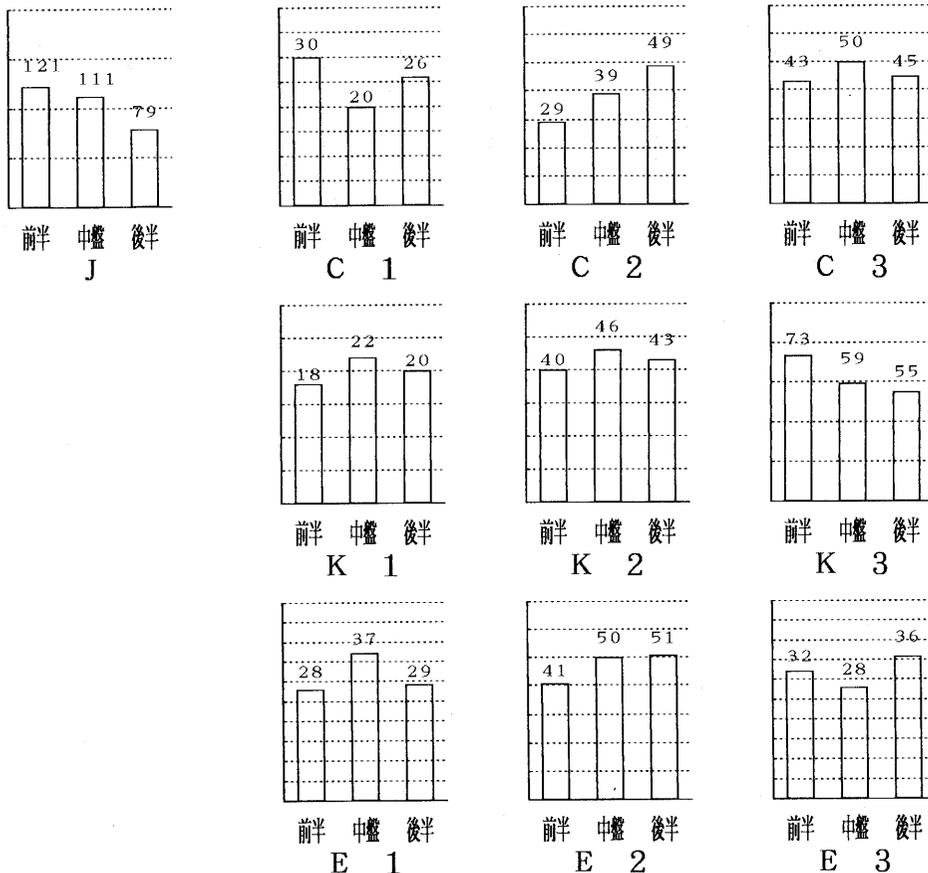


図4 時間帯別に見たあいづちの数

時間の流れとあいづちの頻度との間に、一定の相関関係は見いだせなかった。ここで得られた結果を見る限りでは、水谷も述べているように、あいづちの頻度は時間の流れによる変化をあまり受けないようである。

### 3.2 種類

#### 3.2.1 言語形式別の内訳

学習者がどのような種類のあいづちを使っているかを調べるために、被験者

一人一人について、あいづち詞、笑い、繰り返し、言い換え、先取りのそれぞれがあいづちの総数に占める割合を出した。結果は表3の通りである。

表3 言語形式別の内訳

	初 級	中 級		上 級
	<b>C 1</b>	<b>C 2</b>		<b>C 3</b>
総 数	76	117		138
あいづち詞	69 (90.8%)	111 (94.9%)		127 (92.0%)
笑 い	3 (3.9%)	2 (1.7%)		3 (2.2%)
繰 り 返 し	4 (5.3%)	4 (3.4%)		8 (5.8%)
言 い 換 え	0 (0%)	0 (0%)		0 (0%)
先 取 り	0 (0%)	0 (0%)		0 (0%)
	<b>K 1</b>	<b>K 2</b>		<b>K 3</b>
総 数	60	129		187
あいづち詞	58 (96.7%)	113 (87.6%)		175 (93.6%)
笑 い	0 (0%)	2 (1.6%)		8 (4.3%)
繰 り 返 し	2 (3.3%)	8 (6.2%)		3 (1.6%)
言 い 換 え	0 (0%)	3 (2.3%)		0 (0%)
先 取 り	0 (0%)	3 (2.3%)		1 (0.5%)
	<b>E 1</b>	<b>E 2</b>	<b>E 3</b>	
総 数	94	142	96	
あいづち詞	85 (90.4%)	134 (94.4%)	89 (92.7%)	
笑 い	4 (4.3%)	3 (2.1%)	2 (2.1%)	
繰 り 返 し	4 (4.3%)	5 (3.5%)	3 (3.1%)	
言 い 換 え	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	
先 取 り	1 (1.1%)	0 (0%)	2 (2.1%)	
	<b>J</b>			
総 数	311			
あいづち詞	294 (94.5%)			
笑 い	9 (2.9%)			
繰 り 返 し	7 (2.3%)			
言 い 換 え	0 (0%)			
先 取 り	1 (0.3%)			

初級学習者の場合、あいづち詞による単純なあいづちが多く、中・上級になると繰り返しや、言い換え、先取りなどの複雑なあいづちが出てくるという印象を調査中に受けた。しかし、それを立証するような数値は得られなかった。繰り返しや言い換え、先取りなどの使用には個人差があるとみたほうが無難なようである。事実、日本語の母語話者であり、あいづちを自由に使いこなす能力のある日本人Jを見ても、言い換えの例が1例もなく、先取りもわずか1例だけであった。

### 3.2.2 あいづち詞の使用状況

あいづちの大半を占めるあいづち詞については、小宮（1986：48）の分析を参考に、「感声的表現」と「概念的表現」（注4）とに大別し、それぞれの数を出した。さらに、各被験者の使用したあいづち詞の異なり数（注5）も出した。（表4）

表4 あいづち詞の使用状況

	初 級	中 級	上 級
	<b>C 1</b>	<b>C 2</b>	<b>C 3</b>
あいづち詞	69	111	127
感声的表現	66	69	102
概念的表現	3	42	25
うち	ワカル系 3	ソウ系 41 ワカル系 1	ソウ系 25
異なり数	21	< 30 <	34
	<b>K 1</b>	<b>K 2</b>	<b>K 3</b>
あいづち詞	58	113	175
感声的表現	42	96	134
概念的表現	16	17	41
うち	ソウ系 15 ワカル系 1	ソウ系 16 ワカル系 1	ソウ系 39 ネエ 2
異なり数	24	< 28 <	43
	<b>E 1</b>	<b>E 2</b>	<b>E 3</b>
あいづち詞	85	134	89
感声的表現	61	85	68
概念的表現	24	49	21
うち	ソウ系 10 ワカル系 14	ソウ系 46 ワカル系 2 結合形 1	ソウ系 16 ワカル系 5
異なり数	33	49	25
	<b>J</b>	* 不等号は異なり数を比較してつけたもの。	
あいづち詞	294		
感声的表現	258		
概念的表現	36		
うち	ソウ系 30 ホントウ系 3 ナルホド系 2 ネエ 1		
異なり数	65		

#### 3.2.2.1 感声的表現

感声的表現に関してはさらに、小宮（1986）に倣って、ハイ、ハーなどハを

含むものをハ系、エエ、エーエーなどエを含むものをエ系、ウン、ウーンなどウを含むものをウ系としてその数を数え、それぞれがこれら3つの系の合計に占める割合を出した(図5)。小宮は「ハ系、エ系、ア系、ン系の相づちは、(中略)この順に敬意が減り、親しみが増すという一般的な傾向がある。」(P.51)と述べている。ア系が待遇性と関係があるかどうかは検討を要するとしても、ハ系、エ系、ウ系の順に改まりの度合いが下がるのは確かであろう。したがって、3つの系の使用率を出せば、各資料における待遇性をはかる一つの目安になると思われる。

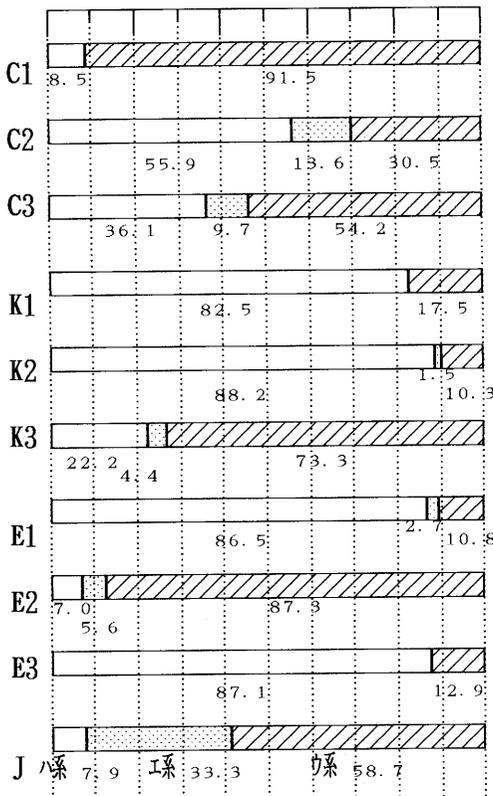


図5 ハ系・エ系・ウ系の割合 (%)

のエ系の使用率が全体の33.3%を占めるのに対して、学習者のエ系の使用率が全体的に低いことに気付く。エ系を全く用いていない学習者も3名おり(C1・K1・E3)、最も多く使用している学習者C2でも15%に満たない。今回の6人の被験者に関する限りでは、学習者はエ系のあいづちをあまり使っていない。

結果を見てみると、ハ系の多い学習者、ウ系の多い学習者、ハ系とウ系を同程度に使っている学習者に分かれるが、学習段階によって特定の傾向は見られなかった。ここでは、ハ系、エ系、ウ系の使用は個人差があると言うにとどめておく。なお、学習者の3つの系の使用傾向を見る際には、各学習者がハ系、ウ系、エ系の改まり度の違いを知った上で、その場の状況に合ったものを選択しているのか、あるいはそのような知識や意識はなく、たまたま自分が使いやすいものを使っているのかという点を調べる必要があるかもしれない。

日本語母語話者と学習者との比較においては、日本語母語話者J

ないということがわかる。

### 3.2.2.2 概念的表現

さらに、日本語母語話者と学習者との間に見られた違いで注目したいのは、ソウデスカ、ホント、ナルホドなどの概念的表現の類型である。学習者の使用した概念的表現を見てみるとその類型の数が少ないことに気付く。ソウデスネ、ソウデスカ、ソウナンデスカなどのソウ系と、アア ワカリマシタなどのワカル系及びネエの3類だけである。しかも多くの学習者がワカル系を過剰に使用しており、日本人Sによると、「単調で、外国人的なあいづちの打ち方であるという印象を受けた」ということである。これに対して日本人Jはソウ系以外にも、学習者が使わなかったホントウ系・ナルホド系及びその変化形を使って、話し手の話への関心の深さをうまく伝えているのが観察された。

### 3.2.2.3 異なり数

学習者が使用したあいづち詞の異なり数を単純に比較してみると、英語話者で初級のE1と中級のE3が逆転していることを除けば、学習段階が上がるにつれて使用するあいづち詞の異なり数も増えていくことがわかる。また、Jの使用したあいづち詞の異なり数は65であって、母語話者のあいづちの多様さを印象づけている。ただし、各被験者間であいづちの総数が異なるので、短絡的な結論づけをすることは避けたい。

### 3.2.3 時間帯と種類の関係

あいづちが資料の始めのころと終わりごろで、その改まりの度合いにおいて何らかの変化をするかどうかを調べるために、先の3.1.3と同じ方法で、各資料を時間によって前半、中盤、後半の3つに区切り、そこに現れたハ系とエ系とウ系のあいづち詞の数を出し、それぞれの系がこれら3つの系の合計に対してどのくらいの割合を占めるか算出した。得られた結果を図6に示す。

全体として個人差が大きく、被験者に共通の傾向は見られなかった。小宮(1986)は、テレビの対談と電話による教育相談の2つの資料を分析し、「時間の進行につれ改まりの高い相づちが減り、替わって改まりの低いものが増えていく」(p.58)と報告しているが、今回の調査ではそのような一貫した傾向は見られなかった。しかし、このように時間帯別にハ系、ウ系、エ系の割合を見ることによって、被験者個人の時間の流れに伴う待遇性の変化をある程度知ることができるようである。

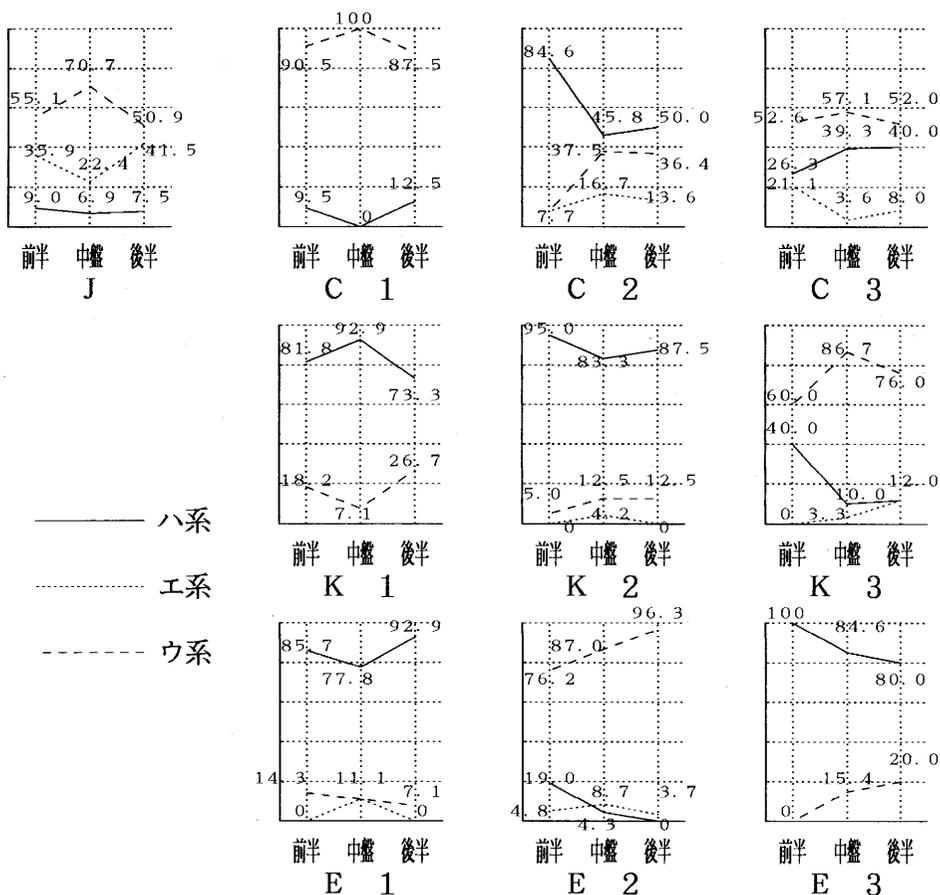


図6 時間帯別に見たハ系・エ系・ウ系の割合 (%)

#### 4. まとめと今後の課題

本稿では、収集した全資料のうちの半数について、そこに現れたあいづちの頻度、種類に注目して分析を試み、学習段階によってあいづちの使用に特定の傾向が見られるかを調べた。一般に、学習段階が上の学習者ほど、あいづちの使用頻度が高く、使用するあいづち（あいづち詞）の種類の数も若干ながら増えていることなどがわかった。しかし、分析した資料が量的に乏しいため、ここで得られた結果からは学習段階とあいづちの使用能力との相関関係についてはっきりした仮説を立てることはできない。今後、残りの資料についても同様の分析を行って同じような傾向が見られるか確かめたい。

学習者のあいづちの使用実態を把握するには、あいづちの頻度や種類のみな

らず、様々な観点から総合的に分析する必要があると思われる。今後、被験者のあいづちが適切なタイミング、イントネーションで打たれているかを調べ、ディスコースの中での適切さ、待遇性などについても検討する予定である。さらに、母語別の傾向についても分析し、母語におけるあいづちの体系からのプラスあるいはマイナスの転移があるかを見たい。このように様々な角度から資料を分析することによって、学習者のあいづち使用における問題点や、学習段階とあいづちの使用能力との相関関係、すなわち学習段階に伴うあいづちの使用状況の変化が浮かび上がってくるのではないだろうか。そして最終的にはあいづちの習得過程を解明できるようにしたいと考えている。

〈注〉

- (1) 堀口 (1991) は、先行研究であいづち使用に影響を与える要因としてとりあげられているものをまとめ、年齢と性別、話し手と聞き手の上下関係と親疎関係、談話の目的、談話の内容、談話の流れ、話し手の話し方、談話状況、話のタイプ、話しのムード、場面差、地域差を挙げている。本研究ではこれらの要因によって被験者のあいづち使用に差が出ないように実験の条件を被験者間ではほぼ一定にすることによって、学習者のあいづち使用実態の比較が容易にできるようにした。
- (2) 学習者には事前に対面、または電話で日本語学習歴や在日期间、日常生活で日本語をどのくらい使っているかなどに関する調査を行った。また、各被験者の発話資料（調査者によるフォローアップ・インタビューで、被験者が質問に答えている部分）からそれぞれ1分30秒分を取り出してアットランダムに並べたものを、日本語文化専攻の大学院生ら16名に聞いてもらい、被験者の話す能力を初級の下・上、中級の下・上、上級の下・上の6段階に分けてもらった。そこで得られた結果や、前述の被験者調査で得られた情報から総合的に判断して被験者の学習段階を判定した。
- (3) 資料中には被験者がターンを握って話し手となっている場面もあるので、厳密に分析しようとするならば、その場面の時間を差し引かなければならない。しかし、今回の調査では、被験者はインタビューをする側に立っており、主に聞き役に回っていることから、ここで得られる数値はある程度信頼できるものであり、少なくとも被験者間で数値を比較する上では問題

ないと判断した。

- (4) 小宮は、「『ハイ』『エー』『ン』などのように、それによって指す概念を持たず、それ自体で直接に話し手の感情を表す表現」を「感声的表現」、「もともとは概念を表す言語形式であるが、『ナルホド』『ホント』のように現在は感動詞的にも使われるような表現」を「概念的表現」としてまとめている。
- (5) 「ハイ」と「エエ」のように表現形式そのものが違う場合だけでなく、「アア」と「アー」のように音の長さが違うものや、「アア ソウデスカ」と「ヘエー ソウデスカ」のように組み合わせが違うものも異なったあいづちとして数えた。

#### 〈参考文献〉

- 小宮千鶴子(1986)「相づち使用の実態 ——出現傾向とその周辺——」  
『語学教育研究論叢』第3号 大東文化大学語学教育研究所
- 堀口純子(1988)「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」  
『日本語教育』64号
- (1990)「上級日本語学習者の対話における聞き手としての言語行動」  
『日本語教育』71号
- (1991)「あいづち研究の現段階と課題」『日本語学』第10巻第10号
- 松田陽子(1988)「対話の日本語教育学 ——あいづちに関連して——」  
『日本語学』第7巻第13号
- 水谷信子(1984)「日本語教育と話しことばの実態 ——あいづちの分析——」  
『金田一春彦博士古稀記念論文集』第2巻 言語学編 三省堂

(お茶大日本言語文化専攻修士2年)